



江戸時代の SNS 「算額」 を復活させる

■ カライスル・アントニア



私は日本に来るまで携帯電話を持っておらず、SNS も使っていませんでしたが、こちらに移り住んでからは、道に迷わないようスマートフォンを持たざるを得なくなりました。そして同時に、日本にしか存在しない「新しく古い SNS」に登録することにもなりました。その名も、「算額」です。

算額とは、数学（当時は「算法」と呼ばれていました）の問題が記された絵馬のことで、江戸時代以降、各地の寺社に奉納されました。算額には通常、奉納者の氏名や流派名、奉納した日付などの情報に加え、しばしば美しい図を伴った数学の問題が記されますが、その解答は示されません。当時の数学愛好家たちは、寺社に問題を掲げることで、自らの発見を神々に感謝すると同時に、その功績を世間に知らしめ、さらには見る者に自力で解いてみるよう挑戦状を突きつけたのです。これらの算額は現在も 900 面以上が全国各地に残されており、私の目下のプロジェクトでは、この日本固有の文化遺産を記録化し、国内外の人々に紹介するために、できる限り多くの算額をデジタルアーカイブに収録しています。

SNS は、人と人とのつながりを可視化する一方で、その背後に隠されたアナログな部分、すなわち実際の対面の出会いを大きく切り捨ててしまう点に、矛盾を抱えているかもしれません。算額についても事情はよく似ています。寺社で算額を目にした後、実際に問題に挑んだ人は、どれほどいたでしょうか。旅行記や書物に残された逸話による証言を除けば、我々にそれを知る術はありません。同様に、私たちが構築している

■ カライスル・アントニア
早稲田大学高等研究所 講師

早稲田大学高等研究所の講師を務めています。現在のプロジェクトでは、算額を対象に、デジタルアーカイブを構築しています (sangaku-archive.org を参照)。



アーカイブについても、その成長を陰で支えてきた数々のアナログな仕事は明るみに出ていません。助手たちによる無数の電話、ファクス、手紙。撮影のために列車、徒歩、自転車、タクシーで移動した幾多の道のり。プロジェクトを通じて交わされた会話、築かれた友情——。要するに、算額アーカイブに注ぎ込まれている人間の営みは、巧みに隠されています。とはいえ、多くの人々の支えがあって初めてプロジェクトが成り立ち得たということは示していきたいと願っています。

今日においても、和算研究者たちは算額の研究について議論を交わしながら、ともに算額の問題を解き明かし、算額の実物を見るべく各地を旅しています。私たちの「算額アーカイブ」は、算額の持つこうした結束力をデジタル空間に立ち上げる試みです。算額は漢文で書かれているので、最大の障壁は言語にあるといえるでしょう。故に、プロジェクトを開始した当初は、何千もの算額を翻刻・翻訳するという大規模で複雑な課題を前に、何千人もの手が必要になるのではないかと、不安に襲われました。ところが、着手からわずか3年のうちに、技術的な状況が劇的に変化し、大規模言語モデルが翻訳の在り方を根底から変化させました。デジタルアーカイブを通じて世界中の数学愛好家を繋ぐという目標が、一気に実現可能なものに近づいたのです。